

始



三體習字手紙の文



特 104
101



1086161

三體習字手紙の文目録

年 始 状

死を吊くる文

飛行機見物誘ふ文

馳走にありしを謝す文

花見に誘われ返事

故郷の安否を問ふ文

開店招く文

就職口を依頼する文

見本を送る文

代理を頼む文

洪水見舞の文

轉居挨拶する文

醫師を頼む文

病気全快を知らせる文

明治天皇
御製

世に人の心を安んずるは
おどろきの日を今にあらはす



恭賀新年

平素の踈遠を謝し猶
将来乃御厚情茂希ふ

大正 年一月元旦

一 商況を問合する文
 送品の着否を問合する文
 貸たる書物を取に遣する文
 土産物を送る文
 代金を請求する文
 未だ逢えざる人へ送る文
 避暑を勧むる文
 周旋致謝する文

金子を借る文
 断り状
 新聞社正誤を頼む文
 身元調を頼む文
 忘年会致催す文

目次をとり

三體習字手紙の文

壽堂仙史書

年始状

新年の慶賀
 芽出度申納候
 先以高堂倍御壯榮御加

年遊むさまを賀し奉り候次
に弊家一統恙なく馬齒を
加へ候間御休心下さま度候
先者年甫の御祝詞まで斯
の如くに御座候謹言

飛行機見物小誘ふ文
明日某地へ海軍飛行機何
号到来の由幸ひ係員よ知
友らも是あり候就て構造の
説明を聴き滑走着水の實

況きやうをも観くわん覧らんいたゞ度たく若も志し御ご
同意どうい候けいはい午前ごぜん八時はちじ迄まで
茅屋かやうへ御立寄ごたちよ下くだささ度たく候けい
匆々きうきう頓首とんしゆ

花見はなみに誘さそええ返事へんじ

御状ごじやう拜誦はいじゆ某所なにかのころの梅花ばいけい咲さき三
初そめ候けいとて探梅たんばい乃御清遊ごせいゆ
御思召立ごぼしりたせらせ候けいよ付御伴つきごとも
仰おほせつつけ被られ御厚情ごこうじやうのほど
感謝くわんしゃいい候けい當日たうじつは萬事まんじ

を擱おとしきても御ご隨づい行こう仕つかるま處ところく
候まう草くさ々々拜まが復ふく

開かい店てんよ招まねぐ文ぶん

昨きのう秋あきより改か築ちく中ちゆうの分ぶん店てん此この
程ほど落らく成せいいたし飾かざり付つけも畧りやく相あひ

整ととのひ候まうよ付つき不ふ日じつ開かい業がふの運えんび
相あひ成なり候まう就つひては聊いさ々々祝ゆく意いを表へう
する為ための何なん日じつ午ご後ご何なん時じより
粗そ酒しゆ一いつ献けん差さ上じやう度たく候まう間ま御ご光こう
來らい下くだささめ度たく御ご案あん内ないままぐぐ匆さう々々

見本を送る文

拜啓貴店益御繁昌賀

奉り候陳者今回弊店

發賣いたし候何品見本と

し組贈呈仕候間御試

の上多少を論せざ御用命

の程希上候別定價表相添

へ申候草々不一

洪水見舞の文

今朝新聞紙電報欄内

承知仕候御地ハ一昨夜来の強
雨より非常の大洪水の由驚
入候御尊宅は某河邊より
せらま候へば最も氣遣を
存ト候よ付取敢ぞ御見舞

追々々敬具

醫師を頼む文

愚妻儀昨夜より腹痛の氣
味に吐きあり候處今朝よ至
り發熱甚しく非常よ苦

居をり候こよ付つき誠まことに恐おそ縮ちぢの至いたり
よは候こ得え共とも御ご来らい診しん下くださ身み度たく
偏ひとへよ希こひねがひ上かみ候こ敬けい白はく

死しを吊たひする文ぶん

御おん祖そ父ふ様さまよは永なが々なが御ご病びやう氣き乃なり

七

處ところ藥やく石せきも其その効かうを奏そうせず昨ま
夜や御ご永えい眠みん遊あそむ身み候こ由よし敬けい馬まさ
入いり候こ皆みな々々様さまの御ご愁しゆう傷やう喚わんく
と御ご察さつ一いつ申まを上かみ候こ此この品しん薄はく儀ぎふ
がら御ご靈れい前ぜんへ御ご供くわ下くださ禮れいたたく

候敬具

馳走になりて謝する文

昨夜は御招きに相成一方あら

ぬ御馳走より預り非常に酪酏

ひい前後忘却の有様より御

座候定め一失禮も之まあり

候もんと汗顔の至りに候何ま

近日参堂の上万謝申さへとい

候得共御詫旁御禮まで斯の

如くに御座候頓首

故郷の安否を問ふ文

郵書を以て申上候昨今は
寒氣一層相加り候處御雙
親様は御障も御座なも哉
伺上候私も御蔭よく壯健に

相勤め居り候間御安心下さる
づく候叔近々商業上の用件よ
付主人の代理として御地邊へ
出張いたし事と相成候よ付き
其途次久々よく拜顔を得た

今より樂たのに致いたし居候伯父上おぢい
並びならに弟あにも右御話下みぎのおはなさる度たく
先者御安否御伺まづおんが迫頓首うかひま

就職口を依頼する文

拜啓益々清業まがとぬか

身たてまの叔おと子こ 國くに之の學がく
校卒業かうそつぎ以い其その職しやくの爲ため免めん
出京被しゅけいし決けつ方ほう人ひとのけ居をり
後のちへども未いまだ意いを返かへし得えず
先まづ時とき日ひを待まちて

よき懐くなくば
然るをきん
以勤の令社或も出關係先
職員の入用は向も出資及び
総料はお当り下りし
百回周旋お礼度履歴書

お添へ申渡はお届
事と申渡はつと長教
代理を頼む又

先般来より経経
子件此の税自被
成

本の何宅に於て會身あひみ至象きんげん
授受じゆじゆ之軍ぐんびににくくは受又小せう
生せい生せい増持ぞうぢ病びやう費えい作さく能に
為免た却居きつ意いよよままのの世せ去こ困こん
却きやく生まかりあり且かつ然しか下げは毎まへ上うへ所しよ

迷惑めいごくよは及およくとも拙者せつしや代だい
破り如りしと出い出い能にお福ふくがし
夜た山さん依い頼らんままぐぐ大だい米まい之し越え
相え良ら教きやう具ぐ

轉居てんきよを報ほうする文

小生係者合は縁り暇る左
池の交々、精は仕り及沙来
かる乃中、何と電車停る留
取よりや、一町をどりき右
横町は、當り大なる公孫樹

の目印、なま有り玉極分り
安くあぶら先は出敷まぐら
旬

病氣全快を知らざる又
毎、くぬね下も是は將何

予入院中に変り明後日
快方に向ひて其明後日
よく近境を許さず先
こころを以て命拾ひを致
し一回安んじり取あへ

高況を問合する文

高況を問合する文

拜啓先店益出都昌の毎
賀一よの叔目六何不此地
向の多由現いめ句るはや
當

地を本年の流り品殆
んど額を賣し後と賣
り面白くならず是れ
方よ此程の額一此地より
此を折方より見込此程

つと急らせ下さるる大
細まぐと昔とを得以
送品の着否を問合す又
棒を去る一日附を以て
文の何れ果を採る為造り

のへ通運を以て後送致し
臣交人今より通運せしむるも
く業つるも一とあるに付き
正照今中より波洞出取調乃
上河分の出を了す。一 願上作

貸したる書物を取遣はす又

お照先日由貸し中へ並き以
書籍正なるを調へたき像
と身あり正簡一歩人此候し持
たせ出を却下され交為

出入用に在りて明き法も重
ねて出用の中より海を治す
を急がせ下さす大
之はふし

土産物を贈る又

使を以て中より良叔取九
時以て海定仕り以て海の中
の良叔取方中速系上被上人
組の又大方疲勞方以て
まゝ出礼仕り何れも

早中一糸上種と旅行
中の面念き出話をも出徳き
に入も大と病一後付の品は
彼地名産とて買と求め以
よ付種少くも是と在献と

以毎一と百出交納下さ斗
以と幸志の五りに出府民
算一教と

代金を請求する文

色日書面を以てる者一並

長安掛代金に傍延備
及び在り以た免地等上の整
理不精なれども成し百何
卒亦るも此送金下りし後
此書および及び作也

未だ逢えざる人よ送る文

一書敬る小生儀は以親類
某氏とは同窓の者として目下
何業相營む居り作が全
回同業発展の計畫に付

是非法拜顔を得御高説
を承り度存候へ共突然
参堂被し候も失礼と存
候幸に御許容下さる候ハ
尤御面會の日限法示し
の

程幾重も願上候敬具
避暑を勧むる文

連日の炎暑を承りら釜の
中に座まゐるが如く耐へ並候
處如何法凌ぎある候

又哉叔小生知人柔儀当
時某地へ遊暑之為の滞
在致し居り話相手もな
日と多柳を令閉口致し居
殊由とて屬々小生へ柔遊

何多樣勸免らま候よ付大
凡一週間許の預定より冬
る積りより座は貴君もも
是非御同行願度如何よ
法座候哉と回答之程願

上候頓首

周旋を謝す又

先頃迄依頼申上置候位

人早速迄身立御遣一 下

是有かごとく御禮申上候

早速當店と則給料等申

聞せ候處本人も承諾以

た一候に付取極め申候取

あつて迄禮迄斯の如く御

座候不備

金子きんすを借かる文

豫かね下御相談致さうだん一置おき候
商せう品ひん買入かひ之儀いれ付取極とりき之
假とら處あひ生憎目下にく手元あつか金まん
圓えん少せう不ふ足そく致い一後ご一了りょう

甚まことにだ申兼狀得共来月下
旬じゆんまで金百圓御拜借願
度迄用済下まき候すり證
書相認しよ之持系仕ぢる可べく
候旬じゆん不ふ乙つ

断り状

御状披見本日貴君御
誕辰之由より御招き下され
有が多し然る處今朝より
急よ腹痛甚しく臥床

罷在候よ付遺憾ながら冬
館仕りね候間何卒悪
らす御思召下よ此度候右
御礼旁貴酬まで草

新聞社へ正誤を頼む文

昨日御刊行の貴社新算
御記載に相成候件、事
實大よ相違の慮、まきあり
候に付別紙原稿差上候間
該記事御訂正下さり度

何卒願上候敬具

身元調へを頼む又

拜啓益御清榮之段賀

奉り候又手小生儀今回迎

妻とつき去る方の周旋下さり

御地某氏長女何子を勸免
らる候が同人も貴家沙近
隣との由承り候よ付誠に
御面倒の御事をも候共
同氏家庭并に本人の性

行等御調べ下さき度返
書の際ハ貴兄乃御判定を
も伺い度右幾重も願上
げ候敬白

忘年会を催す文

拜啓本年も彌餘日少
相成定め—御多忙乃事
と存し奉り候叔例年の
通り来る何日午後一時より
何所某樓においで志存

會相催し度今回も法承
知の如く尚會創立五ヶ年
相成儀より付き祝賀をの
祈り乃開會なせば一層
賑を—致しなき希望に

存ぞん候あひ間ざん萬障しやう御おんきん一
縹くり御ご出し席せき相成あひ度かり別たく
紙餘興し次第だ書か相添あひ御ご
案内あん申上ま候
○尚膳部なほ其他そのの都合つ等ぶ

三平三平
もめらめきめあり候めより明日あした
中ちゆう御出ご席せきの有う無む下名か
の幹事かん宛と御一報ご下
きま度候たく
之躰習字手紙の文了

大正四年八月廿九日印刷
今 年八月一日發行

楊澤形刻

筆者 壽堂仙史

東京神田區平河町二番地

發行者 和田庄藏

東京市神田區平河町(和泉橋際)

發行元 和田書館

終

